二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

小説 さかき傘
挿絵 あぶりだしざくろ

ワルプルギスの淫夢

序　章　006
第一章　魔女ユリーシャ　010
第二章　背信者の館　026
第三章　魔女裁判　055
第四章　蝕む淫夢　096
第五章　評決　161
第六章　魔女イリス　194
終　章　247

登場人物紹介

Characters

ユリーシャ
はるか昔より受け継がれる『智慧』を武器に異端審問官と闘う、高慢かつ美しい銀髪の魔女。

エリザ
肌も露わなコスチュームに身を包む、ユリーシャたちと同業の魔女。

アンリエット・ダングルテル
一見、幼い姿の貴族の娘だが、実際は齢二百五十を越える魔女で、ユリーシャの師匠。

ルイーズ・ラヴリエル
グストーより魔女の嫌疑をかけられた、彫金師の娘。

グストー
献金をもとに異端審問官の地位を得て、私欲のまま魔女狩りを行う悪徳司祭。

ラウル・フラジュロヌ
王室直属の若い騎士。魔女裁判での判事も兼業している。

『第四章　蝕む淫夢』より

哀れな少女たちの嬌声が響く大部屋とちがう、薄暗い小部屋へ連れて行かれ、両腕は天井に、両脚は床に鎖を引っかけ固定された。

エリザが近づいてきて、胸元のラバーウェアを剥ぐ。もともと肝心なところを隠してくれない着衣だが、なくなるとそれはそれで頼りなく、ユリーシャは頬を赤らめた。下を向くと見慣れた自分の胸元は、不自然なくらいムッチリ盛り上がっている。ひどく卑猥なラインに思えて羞恥はさらに極まった。

そんな少女を嬉しそうに眺めながら、先輩魔女は吊られた上体へ手を伸ばす。

「ああ……ステキなおっぱい。プルプルしてシコシコして、素晴らしい手触りですわ」

「ッ……あ、あなたみたいな下劣な女に……、触って欲しくないわぁ」

たぷたぷとバストを弄んでくる女に、ユリーシャはなんとか身を捩らせようとした。しかし四肢を繋ぐ鎖はビクともしない。

「たっぷり脂が乗りましたわね。もうじき司祭様のお喜びになる形に育ちますわ」

「う……っ、うく……」

「それに……、乳首の感度はもう合格点よ」

「あああぁっ！」

女性特有の繊細な指で乳頭を揉まれ、少女はたまらず嗚咽めいた声をあげる。

もともとの感じやすさだけではない。この長い監禁生活中にユリーシャは、その部分の感度も重点的に高められていた。ほぼ絶え間なくラバーメイルの緩やかな愛撫を浴びる胸

乳だが、ぷっくり張った丘陵の頂上だけは開放されているのだ。
一点だけさもしい官能を与えられない薄桃部は、悔しいことに神経を尖らせてしまう。監禁中ずっとツンと尖って、いまでは充血するのが癖になるほどだった。
優しくなぞられると、背筋に鳥肌が立つくらい気持ちいい。しきりに華奢な肩をくねつかせ、襲いくる官能を逃がそうとする少女。しかし乳腺と繋がるへこみをツメで抉るよう引っかかれると、倍化した愉悦の渦はどうしようもない速度でせりあがってくる。
「いい顔ね……。ふふ、分かりやすい子ですこと」
生来の凛々しく引き締まった美貌が、羞恥や戸惑い、そして快美に火照り、一瞬だけ緩む。その陶酔の表情がよっぽど好きなようで、ウットリしながら先輩魔女は卑猥にヌメつく舌を差し出し、頬へ這わせながら、
「誤魔化そうとしても意味ありませんわ。あなたはそういう娘なのよユリーシャ」
パチリと指を鳴らした。
「……っ」
外に控えていたらしい、老執事のダニエルが、ニタつきながら入ってくる。
どちらも『下衆』という認識は同じだが、やはり男である分、素肌を見られる屈辱と羞恥はエリザのときを上回る。ユリーシャが目をそらしたがると、老人は卑屈にも逆にジロジロ顔を覗き込みながら、反対側につけて触手を伸ばしてきた。
「うへへ、日に日に身体つきがいやらしくなりますねぇ、ユリーシャ様」

そのまま枯れ木のような指で、腹部や太腿、臀丘の丸みを、執拗に揉み弄り始める。
「あく……。や、やめ……なさぁいっ。あなた如きが……、うぁあっ」
この老人が相手になるのは、ある意味でエリザより苦手だった。
どうも不能者らしく、少なくとも今日まで、この男の勃起は一度も見たことがない。しかし性欲と異常性はグストー顔負けだった。女をイカせることに無上の喜びを感じ、その気になれば何時間でも愛撫をやめない。射精がないため終点を知らず、何度この男の餌食となり失神させられたことか。
「ダニエル様、お願いいたしますわね」
「承知しておりますよ」
張りつけの身体に、エリザは後ろから、ダニエルは前からすり寄ってくる。
あまりの悪寒に鳥肌を立てるユリーシャ。しかし異常者二人はとりあわない。エリザはぷるぷる暴れる柔乳を鷲づかみにしつつ、首筋や耳たぶを舐めまわし。ダニエルはその乾いた指ならではの、触るか触らないかという絶妙なタッチで、脇のしたや横腹、乳房の付け根、あばら、おへそと、いたるところをくすぐり始めた。
「ひ……、ひぅ……。調子に……乗らな……ぁうぅぅうっ」
羽箒で執拗な肌を掃かれているような、異様な感触である。少女は脅しの言葉も中途半端に細身をくねらせて喘いだ。嫌悪混じりのくすぐったさは、痛みの何倍も不快だ。いっそこの身が裂けるまで鞭で打たれたほうが、どれだけ楽なことか。

「くは……っ。う……、う……？」
肺の近くがゾクゾクするので上手く息が吸えない。切れ切れに肩を揺らしているうち、向こうが何をしたいのかが分かってきた。ムチムチ乳肉を揉み転がすエリザの手とダニエルの指は、流線型の膨らみを這い上がっても、頂上に届く寸前で離れるのだ。思えば男が現れてから、上半身のいたるところに及ぶ愛撫の中、乳頭だけ徹底して触ってこない。
「もっと感じやすくしてさしあげますわ。そう、ココをスイッチにしてあげる。殿方に摘まれるだけでイッてしまう、アクメスイッチにね」
「ヒヒ、心配はいりませんぞ。これだけ敏感なら素質は充分にございますゆえ」
粘っこい囁きが左右の鼓膜に湿った吐息とともに吐きかけられる。
ふざけないでと眉間に皺を刻むユリーシャだが、おぞましいことに執拗に責められる乳房からは、いつしかじれったいような疼きが生じだしているのも事実だった。くすぐり、こねくられるたびジンと腰に響くような妖しい気持ちが生じる。刺激のない乳首がひくひくと脈打っていた。まるで自分も構ってと甘えるように。
「ふふふ、素直じゃありませんこと。モミモミされるの大好きなくせに」
「なぁに身体は正直にございますよ。エリザ様、手を休めずに。だんだんと好色な本性が出てきたようで」
「っ……、〜〜っ……」
いつの間にかユリーシャの口から罵倒の言葉がやみ、浅い呼吸に時おり熱っぽさが混じ

りだしたのを、執事は的確に見抜く。
足を繋ぐ鎖がカシャリと鳴った。仁王立ちのまま動かせない肢体で、ベルトの食い込んだ腰部が微妙に揺れている。そうでなくても普段は品格高い貴族の顔立ちを崩さないだけに、抒情的な紅を帯びたなまめかしい表情はいやでも際立った。
着衣に絶えずマッサージを受けている肢体だが、やはり人肌に触れられる感覚は段違いに卑猥で、段違いに理性を蝕む。着衣が自動で行う機械的な動きでは、あくまで神経を尖らされる程度。しかしねっちり他人の汗をこすりつけられていると……。
「あらあら、いやらしい子ですこと。でも可愛い♪」
片方の手を後ろに回して、仰け反った背筋を撫でる女。すると空いた乳肉にはすかさずダニエルの手が這い寄り、女体を焦らすためだけに編み出したようなタッチを這わせてくる。それどころか跪いたかと思えば、キュッとへこんだ腹部へ唇を押しつけてくる。
「ンぐぅぅうぅ……。もぉ、やめ……なさぃい、汚らわしいわぁ……っ」
次第にくすぐったさがおぞましさと絡まず、別の、ねっとりした感情に結びつきだしているのが分かる。
理知性の薄れない紫の魔眼で脅しても、すでに陵辱者らは止められなかった。張りつけの身体は汗まみれで甘酸っぱい体臭を強め、すっかり脱力している。ワナワナと震える太腿には汗とはちがうエキスがトロリと筋をつけていた。
「ふふっ、強がっても無駄ですわよ」

むしろその生意気な目つきに煽られるらしい、エリザは残忍に笑いながら、乳球へ食い込ませていた五指のうち親指と人差し指を頂点へ向かわせ始めた。気づいたダニエルもつき合い、薄桃の甘地直上へ指をやる。

「貴女はねユリーシャ。こうしてイジメられるほど感じてしまうのよ」

「……ッ！　バカじゃなぁい？」

「いいえ。以前からそうだと思っていたけれど、ロストバージンのとき確信しましたわ」

「ヒヒヒ、そうそう、たくさんの男に見られたら、それだけでいやらしい顔になっておりましたなぁ。身体も嬲れば嬲るほど感じやすくなって、奴隷向きな証拠にございます」

「……～～」

この二人は何を言っているのだろう……。戸惑うユリーシャだが、その言葉にどこか言い知れぬ戦慄を覚え、反論は出てこなかった。

まさにその困惑を狙って、二人の指がとうとう急所、左右の乳首を同時に捕らえる。

「うぁあっ⁉　あっ、ちょ……、ンんぅぅうぅぅあ――っっ」

あまりに突然のことだったので、少女は驚くばかりとなり身をうち震わせた。銀色の髪がエリザの身体に巻きつく。いけない――。二人のたくらみに危機感が生じるが、すでにいくら菌を食いしばっても、激流のような快楽のうねりが足元を突き崩していく。

「その被虐の才能、もっともっと開花させてさしあげますわ」

「この身体だ、極めれば極めるほど肉がオルガに練れてゆくことでしょう。時間はかかり

ません。すでに身体も色の悦びを覚えだしているようでございますし」
「そして……」
鎖を鳴らして必死に肩を揺らし、少しでもいい、官能から逃れようと眩い隆起を左右させるユリーシャ。だが二人は嘲笑うかのように、指先を捻るだけで幼い性感を鷲づかみにして、狂おしい奔流の中へ引きずり込む。
「この味を覚えきったら、もう逃げられませんわ。偉大なる『絶対愛』の教えから」
「――――〜〜〜……っっ」
肉丘のいただきで尖りきった小粒を跳ね回らせながら、少女はとうとうガクンガクンと総身を悶えさせ、狂騒状態に陥った。見計らったようエリザとダニエルが競って指を食い込ませ、美乳の形を歪ませる。恐怖と混乱と、なにより屈辱とに心を引き裂かれながら、ユリーシャはいつしか、甘えるような鼻息をこぼす自分に気づいた。

「おお、イッたイッた。うへへへ、またイッたぞ。いま気をやりおったじゃろう」
巨大なベッドに折り重なって寝そべり、小さな身体を背中から包むよう抱きしめながら、グストーが下卑た声で高笑いする。
常にクールで知的な魔女は、美貌をすっかり火照らせていた。真珠のように煌く肢体はピンク色に染まり汗で濡れる。表情もぼんやりとして、涎の溢れた口元が艶かしかった。
「淫乱になったものよ。教育がいき届いておるようじゃのう」

『第五章　評決』より

口々の感想が虚ろな少女の耳にも届いた。
「いや、いやいやぁ……。見ないでぇ……」
はらはらと銀の髪を揺らし恥じらう少女。だが、
（見られ……てる……わぁ）
視線は被虐という名の感触になって、悩ましい肉手のように尻たぶを撫でた。空想に応じた肛門がめくれピンク色の腸を見せつける。チクリ、ザラリと往復する繊毛球に擦られるのに加え、卑猥な淫欲の視線になぞられたことで粘膜は痺れ、
「へぁぁ……♡　ンはぁあああん……」
ゾクゾクこみあげるものに流され、絶頂スレスレの渦がなおも意識をさらう。
（お兄様……お願い、見ないで。こんなイリスを見ないでぇ）
痺れきった脳裏で最後の理性が泣いた。十年ぶりに出会えた最愛の人。肛門を快楽の道具に、排泄を喜悦の手段にした、伝承の魔女よりよっぽど浅ましい存在となった自分を見られるのはあまりに惨めだった。
なにより恐ろしいのは、自分を惨めに思うほど、身を揉む快楽がどこか奥行きを増して感じられることだ。少女の美貌は知らず知らずのうちに、深い被虐の陶酔を刻んでいる。
「ククク、すっかり奴隷の顔に戻ったなぁユリーシャ」
紅潮した頬、じっとり汗の浮いた額、溢れた唾液に湿る唇。高潔な魔女が淫楽にせり負けつつあるのを的確に見抜き、グストーが耳元で囁いた。

「エリザ。そろそろ腸もいい具合だろう。魔物を処理してあげなさい」
「はい、司祭様♪」
哀れな生贄にとどめをくれるべく、エリザは拷問具の根元で、目一杯まで傾けていたレバーを逆向きに捻った。繊毛を広げて一本のブラシのように腸管を磨いていた棒が、元の連パールの形状に戻る。
「ぅあ……、あああ……」
前後動もやめてしまうので、窄まる括約筋はボールとボールの間に食い込んだ。中ですぐそこまで来ていたアメーバが滞留する。腸壁がきしみ、ちょうど十字の焼印を押された辺りがグルルと鳴った。
「さあユリーシャ。いっぱい力むのよ、ウーンって」
宛てがった器具越しに蠢動が分かるのだろう、エリザは酷薄に笑い――。
――にゅぽ……っ。
「うあっ！」
何百回とピストンさせた取っ手を、突如一方向に引っ張りだした。異物が引き抜かれていく。さざ波のように連なるオルガスムスを漂っていた少女が、途端に目を見開いた。
「だっ、だめっ、だめよぉっ。お尻、いま抜かれた……ら……」
尖端が結腸まで届いているため、粘膜を傷つけないようゆっくりとした動きで、大小様々な球形が括約筋をめくって外へ這い出る。

どれだけ犯されても新鮮に吸着する美肛だが、ぬるぬるのアメーバを大量に吸った器具はさしたる難航なく抜かれていった。巻き込まれた白濁はぶちゃりぐちゃりと音を立てて外に這い出ては、必死に隙間を縫って肛門へ戻ろうと足掻く。だが戻ってからも、今度は腸自体の反応に歓迎されなかった。

曲がった腸壁の奥までいくほど長々と咥えたものに刺激され腸の肉が、排泄を錯覚させるボールの排出にあって、猛烈な収縮蠕動を起こしたのだ。下痢の腹が内容物を吐き出すように、うねり狂ってアメーバを追い出そうとする。ボールが栓をしているいまでもこうなのだ、邪魔がなくなれば、一気に噴出してしまうだろう。

（出ちゃう、出ちゃうわぁ……。お兄様見ないで、イリスのうんち、見てはだめぇ）

かき出される、ではない。腸の中身をひりだす姿を見られてしまう。それは排泄を見られるのに等しく、ただの肛辱を遥かに上回る恥ずかしさだった。少女はなんとか最愛の人の視線だけでも避けようと身をよじらせる。だがラウルは僧兵の縛めが解かれているのも気づかないほど硬直したままこちらを見つめ続け、さらにはユリーシャ自身も……、

――にゅぷ……っ、ポポポポッ。……ぎゅぽっ、

「ひぃぃぃ……」

いくつもの連なったボールが抜けていくうち、なんとか奮い立った理性も、すぐまた官能の海に沈んでいった。連なった球形には微妙な隙間が空いている。そのためひとつ抜けても次までに括約筋が閉じる暇があり、一球一球が清楚に窄まった肛輪を抉じ開けるのだ。

（うぁああ出るっ、でるわぁ……。はひぃっ、四ついっぺんに……、うぅぅっ、つぎっ、いやあ大きいっ、太いわぁ。あっ、あっ、グリグリ広げないでぇ）

小球が連続して荒く腸肛をこすりあげ、大玉は筋肉がツるくらい広々と輪を抉じ開ける。括約筋の裏側はユリーシャにとって弱点のひとつだった。何度グストーの太い雁でめくられ奴隷の歓喜に泣かされたことか。そしてなにより、

――じゅるぽぶぶっ、じゅぽっ、じゅぶぷっ。

「おお、まだ出てくるぞ」

「魔女め、どれだけの魔物を飼っておったのだ」

とくに大きい玉が飛び出た瞬間、腸鳴りに負けて吹き出すアメーバの量が増している。

（お……おぅぅん……出てる。すごい、すごいわぁ……♡）

アナル陵辱の悦びに浸る少女には、排泄そのものが被虐の恍惚に繋がっていた。先ほどは繊毛にかき出され数滴ずつこぼれただけ。それだけでも身体が蕩けそうに感じた爽やかな気分。その数倍の境地が、すぐそこまで迫っている。

ひと舐め味わってしまった悦楽は、期待感という猛毒になりユリーシャの全身に、細胞一つ一つに忍び込んでいた。いけない、いけない、心でどれだけたしなめても、身体が言うことを聞かない。腸壁がそれを求めてしまう。

「さあ……ユリーシャ。あとは全部引き抜きますわよ」

グストーや検事、ひいては他の観衆らを代表して、エリザが改めて丸いヒップに手を置

いた。残りの淫具は十センチ程度。先が直腸まできているため、一気に……、
「……だ……め。〜〜〜ぁ……っ！」
――じゅぽぷぷぷぷぷぷ……っ！
「ひは……♡」
まん丸く見開いた紫瞳から羞恥の涙が粒となって舞う。桜色に火照った哀れな小尻の谷間から、計五つの大小ボールが飛び出した。
汗と涎と蜜に濡れてなまめかしく蕩けていた肢体がピンと張る。ひと玉吐き出すだけで被虐の恍惚を深めていた桃菊は、あまりに連続して筋肉を広げられたせいで、ポッカリ口を開けたまま麻痺してしまった。
恥ずかしいと思う暇もない。フジツボのように盛り上がった妖肛から、ぎゅぶりと音を立てて湯気混じりの空気が放たれる。放屁にすらアアンと鼻を鳴らすユリーシャ……。
――じゅぽぷるるるるるるるるっ！　ぶりゅるるるるるるるるっ！
次いでとうとう仕込まれた白濁が、腸の蠕動に乗って噴き出した。長い脚を発射台にしたそれは高々と弧を描いてエリザの脇をかすめ、石床をぴちゃぴちゃ汚していく。
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいっ……♡　お……ッ♡　っ♡　っ♡」
苦しみの元をひり出せる悦び――。腹をくだしたときようやくトイレに辿りつけた安堵と、何日もよくなかった便通が突然解消されたような爽快感とが同時に身体を包み込んだ。
頭が真っ白になる。ここ一ヶ月で覚えた大人の悦びでなく、ずっと幼いころ、それこそ

赤ん坊のころから精神に刷り込まれていた、排泄という名の悦びに、性の快感とは少しちがうオルガスムスを覚えていた。頭の中身が光の明滅に溶けて、自分がいなくなってしまったような解放感に包まれる。矜持や自尊心すら消えうせるような白さに。

「……はぁぁ、あへぁ……♡」

アナルオルガスムスを噛みしめながら、白濁を噴く尻がいつしかクネクネと8の字を描きだした。今日まで肛門奴隷にされてきた記憶がフラッシュバックし、参加していないご主人様のペニスに肛門を押しつけたがっているのだ。子宮も肉奴の反応を思い出してぴゅくぴゅくと絶頂の蜜を送り出し、滾々とヴァギナから湧き出しては太腿を濡らしていく。

やがてカクンと膝が砕けてその場にしゃがみ込む。捲っていたスカートが落ちて腰元を隠すが、ぶじゅぶじゅと下品な音は響き続けた。音色にシャーっといくらか澱みない音も混じり、スカートの下に黄金色の帳（とばり）も広がっていく。

「……あはァン、うぁあンぅ♡　お尻……おひりィ……♡」

あの高圧的で凛々しい魔女とは思えない、寝惚けた幼子のような貌で鼻先を喘がせる。

「イリス……」

その顔に十年前生き別れた妹を見たのだろう、ラウルが呆けた声で呟いた。

見せつけるようエリザが改めてスカートをめくる。ユリーシャ自身のカカトが食い込んで、房肉をいっぱいに左右へ広げたヒップがあらわになった。

「あー……っ♡　……あー……っ……♡」

白濁は吐き出し終えたが、朦朧とした少女はまだ排泄の喜悦に囚われ続け、もっとたくさんをひりだそうとしきりに息んでいる。麻痺した美肛は適度に緩み、力んだことでムクリと奥からピンクの粘膜がはみ出しては、ぽたぽた腸液を垂らしていた。

腸の中身が空になっても、まだ残っているのではないかとふんばるのが止められない。余計な腹圧をかけるせいで、一度は波のやんだ小水が、ぴゅっ、ぴちゅっと前方向へ散っていた。時おり蠢く直腸の呑み込んでしまった空気が、びゅちりと放屁のような音を立てて肛門をはじき吹き出すと、下品にも「はあん♡」と幸せそうに喉を鳴らす。

「うわぁ……、クソしながら腰振ってやがる。どこまで淫乱なんだよ」

「こいつは魔女に間違いないぞ。悪魔と取引でもしないで、こんな淫売がいるもんか」

陪審員らの、ひいてはラウルを除く裁判官らの声が遠くに聞こえた。

それでもユリーシャは忘我の境地から戻ってこられない。「排泄できる」という至福は、気高い魔女のプライドも理性も懐柔し、それが素晴らしいことなのだと言い聞かせてしまっている。いまの少女は腸の中身を吐き出すことしか考えられない魔物であり、そして、

「よいのだユリーシャ。すぐに我が絶対愛が、お前から悪魔を追い出してやるからな」

「……ああ♡」

力の抜けた身体を抱きしめられると、憎い相手でも甘えすり寄る、哀れな奴隷だった。

『第六章　魔女イリス』より

義務感に急き立てられ「うぅン」と悩ましく鼻を鳴らしながら、伸ばした舌先を目の前にあった硬肉へ這わせていた。目につく範囲から消えた途端、兄の存在はイリスの中から掻き消えてしまっている。いま大切に思えるのは兄でなく、この情欲をぐいぐい押し当ててくる無数の恋人たちだった。

「うぉ……、ははっ、自分からむしゃぶりついてきやがったぞ」

「いいなクソっ、おい、こっちも頼むぜ」

悪戦苦闘しつつも可憐な唇へ根元までおさめきり、しっとり濡れた唾液で毒々しく開いた雁首の溝まで舐り尽くす。頬肉をぴくぴく窄めながら舌腹を巻きつけていると、前後左右から催促が伸びてきた。

少女は手が二本しかないのを申し訳なく思いながら、両手でそれらもできる限り掴み、撫で、しごきあげる。エリザの多分な調教で口腔を犯されることに。そしてグストーの逞しいものを延々相手させられたことで、男性に奉仕することそのものに、深い悦びを覚えるようになっていた。弾力のある乳丘の先で摘んでくださいとばかり勃起した幼いぽっちをピンピン揺らしながら、身体中をクネらせて恋人たちに奉仕する。

「フフフ、いい心がけだ。すべての人へ満遍なく注がれる、それこそが絶対愛だからな」

「ムフん……、うぅん、……――ぁぅっ」

満足げに笑う司祭が、魔女の背を突き飛ばした。ぷるんと柔らかな乳肉を揺らして少女の身体が前のめりになる。すかさず何人かの男が後ろへ回り、肉の谷間を覗いた。

「うわぁ、こんなに濃い本気汁でとろとろにしてるじゃないか」
「尻から魔物を噴くだけであれだけよがってたからな、チンポに囲まれてると、もうたまらないんだろう」
「よしよし、すぐにぶち込んでやる」
本来ラウルの仲間である裁判官たちの一人が、屹立した分身をクレバスに押し当て、ぐいと貫通してくる。
「んんんンんん……ぅ、ぐ……。ひぃぃうぅぅぅ……っ」
「う……むぅ、すごいなこれは」
運よく一人目に当たった男は、屹立した分身を押し込んだ途端に、ぎょっとして軽く腰を往復させた。悩ましく銀髪を打ち振り乱れる魔女の反応を眺めながら、秘口周辺のみっちり敷き詰まったヒダヒダのめくれ具合に驚く。
爛れきった教会には属していなくても、男もある程度の女性経験はある。しかしこの悪魔を宿した美少女の内部は格別だった。粘膜そのものはいまにも崩れるゼリーのように軟らかなのに、少しでもペニスを押し込むと、どこにそんな筋肉を隠していたのか強烈に巻きついてきて、吸い込むかのように収縮する。子供を産むというより、男を楽しませるために発達したような作りだった。
一度入れれば他の性器では満足できなくなりそうな魔性そのものの蜜路に、男は戸惑い、腰を止める。しかし、

「あ……ぁン、イジワルぅ……。お願いです、……早く、もっと愛してください」
入り口で止まってしまった牡器を求め、少女は腰をせり出しながらおねだりした。
くっきりした二重瞼が目尻にかけて一旦下がり、端ではきりっと切れ上がる、たまらなく愛らしい紫の瞳。子供のようにクリクリ丸いあどけなさなのに、いまは色っぽく潤んで、男の本能をこすりあげた。
「――そらっっ！」
「あぁぁぁっ、く、くる……っ。あああああああーーーーーっっっ♡♡♡」
潤んだ蜜肉を一気にかき分け、奥までペニスが埋まる。
痛みとすれすれの感覚は、精神に『絶対愛』を刻まれた少女にとって、至福以外の何物でもなかった。前の裁判も含め面識は二度目。それも自分を軽蔑する相手に貫かれているのに、まるで愛しい人に処女を奪ってもらったようなロマンティックな喜びを覚える。
「あっ、あんっ。ふぁああん♡　すご……ぉ」
「おおう……なんて締まりだ。そらっ、そらそらっ」
早くも膣壁は飲み込んだペニスにぴっちり吸着し、キュウキュウ絞り上げてくる。男は入れたばかりだというのに射精直前のような猛烈なストロークを繰り出し始めた。
「フフフ、いい反応をするな。生まれついての奴隷だけあるわ」
「くぅンぁああダニエル様までぇえぇ……っ、あふっ、うぅぅン、溶けちゃうわぁ♡」
張り出した雁首で猛然と子宮口を小突く男に合わせて、不浄の箇所を揉みほぐしていた

老執事の指が、さらに深々と肛肉をなじる。
ラビアを広げられたショックで、排泄部の筋肉輪は随分と柔らかくなっており、少し押されれば指先をやすやす腸窟まで通してしまった。
「あああぁぁああ」
子宮をがつがつ突かれながら、ヌルッ、ニュルッとアメーバの名残で滑る妖肛に、指をしつこく出し入れされる。
どちらの孔でも昇りつめることを知った少女にとって、双孔責めは泣きたくなるほどの快楽だった。幾多の男たちが。そして兄が見守る中、いやらしく実った乳房をぷるんぷるんさせながら、恍惚とした表情で嗚咽してしまう。
「ああっ、もういい、こっちで」
「お、俺もっ」
側にいるだけで射精しそうな、濃艶すぎる紫の魔眼に誘われ、周囲の男たちがそれぞれに挑みかかってきた。
「ふぁ……♡」
両手や肘、脇、上気した頬。脚の腿や膝にまでペニスが当てられ、ヌタヌタと青臭い粘液を染みつけるよう擦りつけて来る。それでもあぶれた者は、揺れ弾む双乳や唇を指先で弄くり、汗や唾液をつけたり、感触をおかずにして自身で扱き始めた。イリスもできる限り応じて、黒い指環のきらめく指を伸ばし、突きつけられるものを掴み、ヌチヌチと手の

ひらで、指の間で扱く。
「ああっ、すげぇ。こんなネチッこくしゃぶる女、初めてだ」
「これで悪魔の使いでなきゃなぁ。そらそら、サービスしてやるぜ淫乱魔女ちゃん。……おっと、すげぇな、ここもこんなにデカい」
「きぅ……ひゃあああああんっっ。あっ、そ、そこはっ、ああはぅっ、ひぃいいんっ」
男の何人かがお返しとばかりクリトリスへ指を伸ばしてきた。繊細な組織がこりこり揉み潰されて、妖しくこすられると、少女の声がさらに極まる。
調教のせいで包皮が切除され、少女の親指の先ほどに膨らんだそこは、強すぎるくらいの弱点だった。触られるだけでツーンと快美な電流が流れ、恥骨が蕩けている気分になる。
くたくたに揉まれた乳房から、下腹の芯にある快楽の小球までをいたぶられ、抉られる蜜地が火花を散らすように疼いた。受け身になるばかりではなく、甘ったるい吐息を振る舞いながら、臀丘を淫らにクネらせてしまう。
「オラ、口を開けろ」
裁判で少女を苦しめた検事の男が、顔に股間を寄せてきた。すっかり奴隷の顔になったイリスは何も考えずに百合の香りをさせる朱唇を広げる。ぐちりと喉を突くような勢いで、包茎気味の不潔なペニスがねじ込まれた。
「うぅ……むふぅぅぅン」
むごく顔面を揺さぶり、顎が外れそうな勢いで勃起を繰り出してくる検事。フェラチオ

経験はあっても、こんなに乱暴なイラマチオは初めてで、イリスは細眉を歪める。
それでも感じやすい口腔が嬲られていると思うと、いつしかその貌は被虐に蕩けていった。鼻先からウゥン、ムフンとくぐもった淫鳴を溢れさせ、忙しなく出入りする生臭いものへ舌を絡める。コツを覚えるころには、喉に亀頭がぶつかる男のリズムに合わせ、くびれた腰を躍らせてさえ見せた。長く伸びてくる舌が献身的に砲身へ巻きつくと、男が痺れきった唸りを漏らす。
「うふふ、ようやく絶対愛を覚えたようねぇ」
外れたところでルイズと二人、あぶれた男たちの相手をしているエリザが嘲笑する。
あんなに憎らしく見えた女の顔が、いまとなっては慕わしく思えた。この人がいなければこんな世界は知らなかった。そう思うと感謝すら覚える。唇を犯す雄物への奉仕は怠らないまま目尻を細めてみせた。
「うぉ……っ。ああ、出るぞ。この淫売めっ、お前の大好きなものをぶっかけてやる！」
口を犯す検事の男が真っ先に悲鳴をあげた。そこらの娼婦でもされるがままになるほど乱雑なイラマチオをぶつけているのに、魔女の口腔は驚くほどヌンメリ余裕をもって迎え、愛しくてたまらないといった感じに舌を巻きつけてくるのだ。たちまち射精欲に呑まれても仕方なかった。
「んは♡　は、はい、ちょうだぁい。いけないイリスの好きなところに、熱くて濃いチンポ汁ぶちまけてぇっ」

じゅぽりと唇から引き抜いて、生意気に高い鼻へ穂先を向けられる。するとイリスは夏場に水浴びでもする幼女のように目を細めて、ピクピク痙攣する亀頭肉へ頬ずりした。

――ぶちゃるっ！　びゅくくっ！　びゅるっ、びゅるるるるっ！

一気に噴射して美しい顔を、髪を、身体中を汚していく。

「……っう！」

「あっ、ああっ」

女神と見紛う肢体が汚らわしい粘液に覆われていく。見せつけられた周囲も、一気に吐精に引きずり込まれた。これまで人生で自慰も含めれば何回射精したことか。しかしこの一回が最高のものになる確信を持って、黄ばんだ白濁を顔へ、身体へ、腕へ、腿へ。果ては美しい銀色髪や、美脚を強調するピンヒールの先っちょにまで振りかけられた。

「はぁん、あああああん♡　ステキ……温かくて……ああ♡」

無数に降りかかる男らの欲望すべてを愛しみ、魔女は艶めく肢体をうねらせている。

蜜肉をコネる男根やヒップの谷間をねとねと抉る指が呼ぶのが火柱のような快感なら、全身に塗りつけられる淫欲のエキスは、バスタブにでも浸かっているような優しい幸福感だった。ねっとり静かなオルガスムスを迎え、獣這いの淫靡な肉が悶え狂う。

「くっ、うぉお……っ」

そのアクメでバックから犯す男も限界にきた。小ぶりな尻の裂け目に自身のものが往復している様を、いつまでも眺めていたいとピストンし続けていたが。達した蜜部が淫らに

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

キルタイムコミュニケーション オフィシャルサイト

http://ktcom.jp/

◎雑誌、コミック、小説の**通信販売**もやってるよ!
◎二次元ドリームマガジン・コミックアンリアルの**バックナンバー**も買えるよ!
◎**ジャンル別**で作品も選べて超便利!
◎二次元編集部の愉快な**Blog**も更新中!
◎期間限定で、文庫お買い上げの方に**オリジナルブックカバー**をプレゼント!

KTCの戦うヒロインオンリー漫画雑誌! 18禁ではないからこそ表現できるドキドキがある!!

二次元ドリームノベルズがアニメにも進出! 新生ブランド・クランベリーをよろしく!!

二次元ドリームノベルズから生まれた美少女ゲーム! 「ミルフィーユ」ブランドにて続々登場!

二次元ドリームノベルズが携帯電話で読める! 携帯サイト限定の書き下ろし小説もあるよ!